

私の一冊

歯科衛生学科 鈴木 桂子 先生

著者名 アルベール・カミュ著 『ペスト』

小鹿図書館 908||Sh 61||48

アルベール・カミュの代表作『ペスト』についてご紹介します。

2020年世界的な感染拡大によりパンデミックが宣言される中、未だ収束の兆しの見えない新型コロナウイルスの脅威と、1947年に刊行されたこの小説はあまりにも酷似しています。ペストという伝染病のために、ロックダウンが起こり、外部から一切遮断されたオランという港町で疫病と闘う市民たち。その生々しい記録を、カミュは予言者であるかのように描写しています。主人公は、そのオランに住む医師のベルナール・リューです。[ベルナール・リューは、診察室から出かけようとして、階段口の真ん中で1匹の死んだネズミにつまずいた。]こうして始まっていく物語の語り手は、実はこのリュー本人です。ネズミの死骸は日に日に数を増していき、平穩だったオランの町は、群をなして死んだネズミと原因不明の病により苦しみ喘ぎながら死んでいく人間で溢れていきます。その様子を見たリューは、不安を募らせませんが、ペストの公言をばかると医師、のらりくらりと結論を先送りにし認めることをためらう知事たちにより行政の対応も後手後手に回ります。その後オラン市内の死亡者の数は、わずか10名ばかりの死亡者を数えただけの数日を経て、突如爆発的に上昇しました。「ペストチクタルコトヲセンゲンシ シヲヘイサセヨ」ロックダウンの宣言です。通常交通手段では国内の他の部分と連絡できなくなり、手紙でさえも一切禁止されてしまいました。病床の不足からホテルや学校までもが提供されるという状況下で、耐え難い疲労を抱えながらリューは懸命に患者の診察を続けていきます。そのリューの手助けをする者、法を犯してでも何とかして町を脱出し妻のもとに帰りたいと画策する者、悪事に手を染めペスト騒動で金もうけを企てる輩、血清の開発を進める医師の存在、買占め騒動、デマの拡散、経済への打撃など見てきたかのようなカミュのリアルな描写が、今まさにその渦中にある私たちと重なります。小説でのロックダウンは9カ月もの長きにわたりますが、カミュはそれを「追放の状態」と表現しています。『人間に不幸と教訓をもたらすためにペストが再びそのネズミたちを呼びさまし(中略)差し向ける日が来るであろう』小説はこう結ばれています。決して忘れてはならない大切なこと。その真っ只中に今私たちはいます。

※ペスト:節足動物(主にネズミノミ属のノミ)によって伝播される。特に肺ペストは発病後24時間以内に死亡するといわれ、2019年時点国内で接種可能なワクチンは無い。